

台風にごきをつけよう

立春から数えて210日目は、二百十日(にひゃくとおか)とよばれています。だいたい9月の上旬にあたるこの前後が、日本列島に台風が襲来する時期にあたるため、厄日とされています。

気象庁によると、例年日本列島に上陸する数は平均2.7個で、これは10年前の平均2.6個を上回り、上昇傾向にあります。今年も7月に(7月3日現在)台風が3個発生しています。二百十日とは言うものの、実際には8月が最も多く上陸します。

台風は必ずやって来るといのに、依然として日本のどこかで毎年各地に大きな被害をもたらしています。そこで、豪雨や台風、竜巻などの自然災害から子どもを守る家庭での対策などを考えてみたいと思います。

急速に発達した積乱雲によって局所的にもたらされる大雨を「集中豪雨」といいます。近年は、短時間のうちに激しく降る局地的大雨(ゲリラ豪雨などとよばれる)が多くなってきています。集中豪雨は、前線が日本付近に停滞している梅雨の終わりや、台風が日本に近づいているとき、あるいは上陸しているときに多く見られます。

予測がしにくいので、緊急避難に備えた非常持ち出し品、水や食料などの非常備蓄品を常に用意するようにしましょう。

集中豪雨に見舞われたら

突然の豪雨に見舞われたとき、いったいどのように対応すればよいのでしょうか。たいていの場合、激しい雨は短時間で通り過ぎるので、無理な移動はせず、雨宿りしてやり過ごすのがもっとも安全だといわれていますが、場所によっては危険が迫ることもありますので、正しい状況判断が必要です。子どもが危険を理解するために、集中豪雨によってどのようなことが起きるかを教えておきましょう。

集中豪雨が起きるとどうなる

- ① 前が見づらくなり、息苦しくなる
- ② 河川が急に増水したり、氾濫したりする
- ③ 家が浸水したり、道路が冠水(水につかる)したりする
- ④ 土砂崩れやがけ崩れが起きる
- ⑤ 排水が間に合わず、水が地下(地下街、地下鉄、地下室など)に流れ込む

降水量は、1時間に80mmを超えると息苦しくなり、100mmを超えると恐怖を感じるようになります。低い位置には、冠水した水が一気に流れ込むことがあり、大変危険です。とくに都市部では排水が間に合わず、地下に冠水が集中します。なるべく高台や高い階に移動し、土砂崩れやがけ崩れのおそれがある場所からは遠ざかってください。

こんな所にいるときは避難しましょう

- ① 河川のそば
- ② 用水路のそば
- ③ 坂や崖の下
- ④ 山のふもと
- ⑤ ビルの地下や地下街

台風は事前の備えが大事

台風の進路については、テレビやラジオなどで最新の気象状況を定期的にチェックして進路予想や注意報などを確認します。また、災害時には子どもを園に留めて保護者が引き取りにくるのを待つことになっているところが多いと思いますが、台風のときの対応についても、きちんと園に確認しておいたほうが安心でしょう。

また、子どもを迎えに行き帰宅する際、危険箇所(マンホール、側溝、小河川など)が濁流で冠水した場合、そうした危険箇所が見えなくなります。避難途上にふたの外れたマンホールや側溝に落ちて犠牲となるケースが圧倒的に多いのです。自宅からの避難経路にある危険箇所などを確認して、行政や自治体などが作成する洪水ハザードマップに位置を記入しておくことが大切です。

台風被害を減らす事前対策

台風のときは、家族全員が早めに帰宅し、雨戸をしっかりと閉めておくようにしてください。ガラス戸が風で割れることもあるので、カーテンも閉めておきましょう。そのほか、被害を減らすための対策をあげてみました。

・ 家を水から守る
排水溝、側溝や雨どいの掃除をして、家の周りの水はけをよくしておきましょう。

・ 家の周りを点検する
台風が近づいてきたからの家周りの確認は危険を伴います。普段から、風で飛ばされたり倒れたりする可能性がある物干し竿や物干し台、自転車、植木鉢、ゴミ箱などを確認して、いつでも室内にしまったり、きちんと固定したりできるようにしておきましょう。

・ 屋根や塀を点検する
暴風によって壁や塀、屋根などが飛ばされる被害も考えられます。普段から点検や補強をしておきましょう。

